人新世の環境学へ

写真は『世界』4 月号、宮本憲一先生と斎藤幸平さんとの「特別対談」第 1 回である。昨年 12 月 13 日にレポートしたが、12 月 11 日に京都で開催された宮本背広ゼミ主催の『未来への航跡　環境と自治の政治経済学を求めて』出版記念企画で二人が対談した。対談をジャーナリストの佐々木実さんが構成し、神戸新聞経済部長兼論説委員の加藤正文さんが解説したものである。

人新世の環境学へ
SDGsは「大衆のアヘン」か？
特別対談 第一回
宮本憲一 × 斎藤幸平

私も対談を会場で直接聴くことができ、詳細にメモをとった。写真下は当日の会場風景。左から順に斎藤さん、宮本先生、加藤さん、佐々木さん。3 時間半におよぶ対談であり、じつに多くのことを学んだ。佐々木さんによる対談のまとめから、冒頭のところを抜粋して紹介しておきたい。

（宮本）地球温暖化とコロナのパンデミックは、ある意味で、地球の未来についての転換を示す出来事で、資本主義にとっては二つの危機といってもいいかもしれません。新しい資本主義でこの危機を乗り越えるのか、もう資本主義は限界にきて別な体制を考えなければならないのか。そういう二つの道があるわけです。別な体制というのは、欧米でいわれているエコロジー社会主義のような、新しい社会主義ですね。今回は戦争でも恐慌でもなく、地球環境の問題から資本主義の体制が問われています。

（斎藤）私が『人新世の「資本論」』で脱成長をいいはじめたのは、まさに宮本先生が指摘されたとおり、気候変動危機をグリーンリカバリーが目指す「緑の資本主義」「緑の経済成長」で克服できるのかという疑念からです。気候危機は緑の近代化では克服できないと私が考える第一の理由は、タイムリミットの問題です。現在の経済成長を優先した浪費的ライフスタイルを維持したままエネルギー転換をしようとすれば、（中略）結局、途上国からの資源や土地の収奪が必要となります。私が唱えている脱成長とは、より持続可能なだけでなく、公正で平等な世界へ移行するために、先進国が途上国からの掠奪をやめ、経済を計画的にスケールダウンさせていくものです。

加藤は解説で「宮本と斎藤の対談の白眉は体制変革の道筋をめぐる議論だ」として、二人に「共通するのは資本主義に代わる新たな道筋を求めるエネルギーと構想力だ。環境と自治の現場から描く未来社会の姿がくっきり像を結んだ」と締めくくる

（2022 年 3 月 16 日）